

米国の精神科看護研修ツアーに参加して

金沢大学医療技術短期大学部

萩野 妙子

金沢大学医学部附属病院

小川 洋子

奥 菊枝



デトロイト → ワシントン → ボルチモア → ニューヨーク → トロント → デトロイト

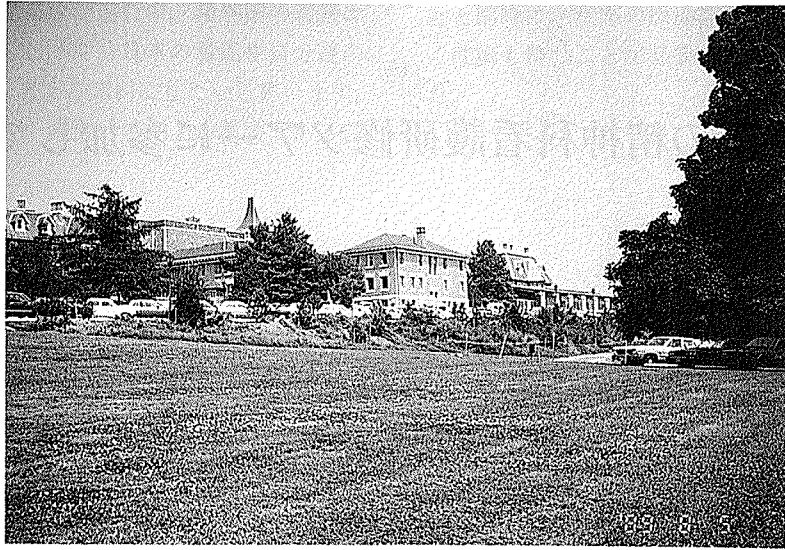
平成元年7月31日(月)～8月9日(水)の10日間米国の精神科看護研修を含むツアーに参加する機会を得た。

日本赤十字看護大学 稲岡文昭教授をコーディネーターに、以下北海道から九州までの所々の施設から看護婦・看護師・看護学生を交えた30名の編成である。殆どが海外旅行初めての者で大きな期待に胸をはずませての出発であった。

成田空港よりアラスカを經由し1万km。デトロイトで通関の手続きを済ませワシントンD.Cへ。先ずアーリントン国立墓地で永遠の

灯に祈る。ついで国会議事堂、ホワイトハウス、リンカーン記念堂の見学の後メリーランド州ボルチモア(BALTIMOR)へ向かった。すなわちボルチモアにはメリーランド大学があり、その看護学部が研修の場である。ちなみにボルチモアは商工業、文化、教育の中心地であり、メリーランド州最大の都市(人口79万人)で古くは港町として栄えたところである。

メリーランド大学でのレクチャーは職員が使用する会館の一室で始められ、とてもきれいな所であり、また私たちは歓迎してもらっ



ペブローやサリヴンがかって勤務し勉強した
Sheppard and Enoch Pratt Hospital

た。

メリーランド大学は100年余の伝統があり、全米でも由緒ある大学とされている。看護学部は18の専門分野に分かれており、中でも健康管理の専門においては他の大学からも注目され、また精神科看護の分野は全米でも唯一のものとしてされているという。

米国での研修責任者はメリーランド大学：リサ・ロビンソン教授で、アメリカ大陸にふさわしい巨体の持ち主である。通訳はジュンコ・マクリアム(心理のDrで病院ではトップクラスの地位にあり自宅でも開業)という聡明な日本女性であったが、このコンビは実に絶妙なフィリングですすめていく。それはジュンコ先生が日本人で、かつ生活の場がアメリカであり、また精神科の分野にたずさわっておられるので彼女の頭の中を通過すると私たち日本人向けでとてもわかりやすい通訳となった。男女雇用均等法がやっと成立した日本と比較して、なんと女性が堂々と胸をはって自信に満ちた姿でいるかに同性である私たちは魅力とともに感動を覚えた。

米国の研修プログラム

- 1 日目 講義「看護者—患者関係の性質と効果」
見学 チェスナットロッジ病院
(ワシントンD・C)
- 2 日目 講義「医療チームアプローチにおける精神科看護者の役割と機能」
見学 国立精神保健研究所
(ベセスダ市)
- 3 日目 講義「臨床における判断の性質と効果」
見学 シェパード エノック パラット病院
(ボルチモア市)

上記研修の中から要約を紹介したい。

1. 看護者—患者関係の性質と効果

この講義では比較文化的精神医学の観点から、精神科の治療・看護を行なう場合文化的要因が非常に大きく関係することが話された。すなわち日本人と米国人との文化的思考の違いが大きく、その違いが看護者、患者の行動あるいは看護者と患者関係の性質のちがいと

しても現われるし、その効果を判断する時の違いとしても現れるということである。その例として患者に対する文化的思考について日本と米国の文化の違いを如実に示しているとして次のエピソードが紹介された。

「かつて7～8前カリフォルニアにおいて日本女性が子どもを死亡させた裁判があった。この女性の訴訟になった理由は、夫に蒸発され“うつ状態”になり、二人の子供を道づれに海へ入水し自殺を計った。しかし女性と一人の子供は助かったがあとの一人は死亡してしまった」

この女性の行為に対して米国の文化的思考で解釈する場合と日本の文化的思考で解釈する場合、法廷における裁判では根本的に異なってくるというものである。すなわち、米国では人を死なせたことは如何なる精神病患者であっても社会的には許されず、彼女に子供を死亡させる権利はないという判断であり、日本の場合のように状況のみで自殺する彼女の行為に同情を寄せるといった判断とは全く異なっているのである。このように日本と米国の文化の違いが行動を判断する指標となっているというものである。

もう一つ看護者—患者関係に影響するもので、日本と米国の違いが大きいものとして言語が挙げられた。言語というものは治療や看護をする上で非常に大事である。言葉の使い方によって対人関係が異なってくるからである。日本と米国の言葉の違いは日本語は複雑であり、そして日本人は割合抽象的な言い方が多いが、英語は端的で自分の経験なども率直に表現するという。このことは日本と米国の文化的解釈によって看護者と患者との対人関係が異なってくるというもので日本の治療、米国的治療という考えができると説明された。その例として“愛”という言葉が取り上げられた。米国人は“LOVE”は主人に対しても、子どもに対しても、犬にも同じ“LOVE”であるが、日本ではそれを象徴するには微妙な

表現になりやすいというものである。

更に看護者—患者関係に影響する日本と米国の違いのもう一つとして、幸福の概念が挙げられた。幸福の概念について日本人あるいは東洋人の幸福とは、情緒的なものや社会的なものとの協調し、自分と他者が共存できることが幸福であるようにとられている。いわゆるハーモニーの中に生きているのが幸福であり、自己と他者が連結して成り立っているのではないかという考え方である。それに比べ米国人の幸福というのは自分が外部社会、自然環境にチャレンジし、どれくらい人間として達成できたか、その達成度を根底において幸福を考えると、あるいは自己の気持ちを正直に表現できたとき、また自然と一体感をもったときの幸福感であり社会的に現われる幸福感はないという考え方であり、つまり自己が如何にユニークか、強いか、成功したかなど、自分を中心にした幸福論であるといえる。

2. 医療チームアプローチにおける精神科看護者の役割と機能について

この講義は米国のチームアプローチの歴史と現在のとりくみが紹介された。歴史的にみると米国も日本と同様に、薬物療法の出現する1950年以前には何十年と入院していた患者が多く、その患者にとっては病院での生活が家であり、職員は家族であったという。薬物療法が導入されるようになってから患者を地域社会へ帰すという意識が高まり医療者側でもできるだけ退院させるように運動した。しかし退院させられた患者は社会の底辺にたむろし、社会問題を引き起こし、結局は精神病院に戻るといった現象をきたした。

そういう事からメリーランド大学では3～4年前より中間施設的な動く治療ユニット MTU (Mobile Treatment Unit) を開設した。即ち短期治療を施しできるだけ社会に帰すが、その後丁寧に follow するシステムである。ユニットのスタッフはメリーランド大学医学部の精神科医、マスター、レジスタード ナー



第3回研修ツアーで受講証を受取る

ス、ソーシャルワーカー、秘書からなり、さらに医学部の学生、看護学生も参加している。きちんと服薬がなされているか、家族とのかかわりはどうか、仕事の具合はどうか等を週3回位チェックする。かつ相談したいことがあれば365日いつでもスタッフの誰かに連絡がとれるように網が張られており、患者にとっては安心感が得られ、またスタッフも患者の生活の場に赴くため密着した治療が行なえるというものであった。MTUの成果は、そのユニットにfollowされたクライアントの6%が再入院しただけであり、関係しなかった人は58%が入院したという報告があった。

3. 臨床における判断の性質と効果

リサ・ロビンソン教授は直感を看護の第一過程と考えて仮説をたて、患者の理解を深めていくように研究をすすめているという。

臨床上で看護判断をするとき何となく感じる、はっきりしないけれどもその感じたものに基づいて判断をしている、それが直感であり直感の働きに基づいて看護判断をしているのではないだろうかというものである。直感には精神分析でいう第一過程に相当し、すなわち一番始めに人間が感じる思考とも情緒とも

言える。フロイトは“イド”の無意識の中の一部と言い、日常生活を送っているとき何となくひらめくもの、感じるもの、それが直感であり、人間と人間との間にコミュニケーションが開いていく過程の始まりなのではないだろうか。ウエスコット(1968)は直感とはインフォメーションがないとき、どう解決していくか、その問題を解決していく能力であると言い、アサギオリ(1977)は高度の視覚と定義している。

リサ・ロビンソン教授は直感の必要性だけでなく、看護者は臨床の場において看護判断をするとき意識下の中での思考、観察を大事にすることが重要であると述べた。そして方法や目的が何であろうと要するに職業人として社会の中心から外れている患者が成長するように、できるだけ生活をしていけるように援けて上げるのが私たちの使命であると結ばれた。

研修2日目の見学の後、リサ・ロビンソン教授の自宅に全員招待され御馳走になった。プールに入った人もいる。近所の人たちも人なつこく訪ねられた。とかく米国人はおおらかで明るい性質の持ち主と聞いていたがそ



ニューヨークの TIFFANY の前で

の通りであったと思う。

研修3日目の最後の夜は町の料理店でお別れパーティーが開かれた。それぞれがおみやげを持参しプレゼントをするたのしい一時であった。そして私たちにとって一番うれしかったことは研修の受講証を受取った時であった。

INTENSIVEな3日間の研修を終え開放感に浸りながらボルチモアを後にする。バスにて米国の顔であるニューヨークに入り、独特の高層ビルに圧倒され言葉も出なかった。早速エムパイヤステートビルや国連ビルなど見学、自由解散はティファニーの前だった。町を散策しその夜はブロードウェイのミュージカルを楽しむ。ニューヨークではかつて日本の女子学生が殺人にまきこまれた事件があっ

たが、その概要の説明と自己防衛のあり方についての注意があり、何となく殺人の町というイメージが漂いととも怖いという思いをもったことは否めない。ニューヨークより航空機にてカナダのトロントへ。オンタリオ湖が見えてきたとき、かつての幼き日地理の授業で教わった5大湖がよみがえる。ついで雄大なナイアガラ瀑布の水しぶきに歓喜し、まさにアメリカ大陸の景勝地であることをまざまざと思い知らされた。また毛皮と翡翠がまぶしかった。いよいよ旅も終わりに近づき、トロントより再びデトロイトにて搭乗し帰国の途についた。すばらしい晴天に恵まれてのツアーであり、そして明日への英気が養われる思いであった。